32

郡医と鷗外の父、森静男について

木村　繁

東京府における区医郡医について、千住宿区医、南足立郡々医森静男にまつわる事項より若干述べる。

明治七年八月、医制が発布され、明治九年九月、東京府では各小区当番制を設けたが不備であったため改め、済恤を趣旨とする貧民の治療と種痘を担任する区医を置く「区医職務心得」が明治十年六月に布達された。東京府を五十区にわけて区医出張所を設け、東京府本病院、および第一、第二分局、順天堂、区医十七名が分担した。同時に千住新宿品川板橋の四宿にも区医が置かれ、千住宿には、森鷗外の父である森静男が任命された。他の三宿場の区医は東京府病院医員より選任されたが、森静男の経緯については不明である。

森静男は天保六年閏七月二十日周防国植松村（現防府市）大庄屋吉次定正の五男として出生し、津和野藩々医森綱浄に師事し、請われて森家の婿養子となった。文久三年より三年間西洋医学所と佐倉順天堂に遊学しており、佐藤尚中や松本順また同門の長谷川泰（明治九～十四年東京府病院院長）や芳賀寛（板橋宿区医）などの推挙も考えられる。地区の開業医師集会幹事であり、また度々演説しその一端は後に「仮死論」（明治十二年四月刊）として出版するなど人望厚かったことも関連あろうか。明治十年（一八七七）六月七日区医出張所の管理を命ぜられて、千住宿北組三十番地横尾龍助宅において同年七月十一日より診療開始、十一年十一月区医となり月給二十円。向島小梅村より人力車で通勤していたが、明治十二年千住宿が南足立郡となった際、六月十一日初代郡医に任命されて千住に土着することとなり、郡役所近くの岡田紋治郎の家を借り、千住宿郡医診療所を兼ねた橘井堂医院（千住北組十七番地、現足立都税事務所構内、敷地三百平方米、建坪百四十平方米）を七月一日に開業した。郡医として住民の防疫、種痘、施療などの任務にあたった。

ここで同診療所の診療規模の一端について触れたい。

この四宿区医出張所が郡医に引き継がれる際に、その設備一切が払い下げられた。東京都公文書館の記録によれば、千住宿主張所では器械類九十円五十七銭五厘、薬局器械七十二円四十八銭薬品十三円十銭一厘、雑品二十円九十五銭二厘であった。器械類は、四十二点で、薬篭（八円）、三つ折サック（器械二十三品入り十円）、膿盆、抜歯器（一具三本入り五円）、検眼鏡（小一具四円）、検温器（二本二円五十銭）、皮下注入器（一具一円六十銭）、聴胸器（二本六十銭）、打診器、鼻鏡（四十銭）、検耳鏡（一円）、銀製欧氏管（二本六十銭）、舌押え（二箇六十銭）咽喉鏡（十円五十銭）、種痘器（二円五十銭）、浣腸器、眼洗器、感応電気、喉頭消息子、吸角、蒸気吸入器、金創針、カテーテル、海綿、子宮スポイト、その他。薬品類は八十八種で、過酸満俺加里、乳糖、純精酒石、硫酸加里、単寧酸、安息香酸、塩酸、硼砂精、硫酸、甘精、紅葡萄丁幾、芳香硼砂精、複ラーヘル精、橙皮丁幾、肝油、ヲレーフ油、阿片丁幾、クロラルヒトラート他。薬局器械は二十三点で天秤二組六円八十銭オンス壺四十七箇十二円その他。備品類は三十五点でテーブル、並椅子、南京椅子、印函その他である。これらは東京府病院系列の診療所レベルでの医療設備であるが、とくに演者の所属する耳鼻咽喉科領域に関しては、我国最初の耳科喉頭科専門医となった賀古鶴所が日赤病院で診療を始めたのは明治二十二年であって、明治十～十二年ころのいまだ専門技術が普及していなかった時代であったにも関わらず、耳管通気法に用いる欧氏管カテーテルや、咽頭鏡光源装置が常備されていたことは特筆に値すると考える。明治十一年刊松本市左衛門の医療器械図譜などと比較した。薬局ではクロロホルムが常備されている。鷗外の小説「カズイスチカ」に父に代わり往診に行き破傷風痙攣に「クロラアル」を用いて卓効のあった症例を述べており、同医院での診療を偲ばせる。

（木村耳鼻咽喉科小児科医院）